

18-7 授業解題

島名：グローバル・ヒストリー

教科（領域）：国語・理科・英語

単元（教材）：古典を科学する

対象：高校一年

授業者：川井亮先生（国語）、岡本幹先生（理科）、佐古孝義先生（英語）

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

○国語（古典）、英語、化学を横断するこの授業では、まず授業前半で古典の知識を用いて文献を精読し、「鏡」が各時代に持った社会・文化的役割の比較を行った。さらに西洋の歴史で「鏡」が登場するエピソードなども紹介することで鏡の役割の違いの東西比較が試みられた。それらを踏まえたうえで後半の理科の授業では、青銅鏡と現代の鏡をそれぞれ実際に製作することによって、古典で理解した内容を実際に「触れて」体感するという試みがなされた。

○本授業の強みの一つは、東洋・西洋はもとより多くの地域・文化圏で重要な意味を持つ「鏡」に着目することで文化を時間軸と空間軸で比較的論じるための足掛かりを築いていることにある。

○その際、古典と英語に立脚する前半部分では鏡が含意する自己と他者の認知機能にまで踏み込んでおり、それだけに高度に抽象的な概念の理解と操作が必要とされている。こうした取り組みは、時にアイデンティティ・クライシスを伴う現代のグローバル世界を生きるうえでも有意義といえる。そのうえで本授業がグローバル・ヒストリーの一環として持つ特色は、後半の理科の授業で銀鏡や古代の青銅鏡を実際に作らせることによって、理解を立体化する、あるいは知識に「中身」を入れるという試みがなされていることである。これによって、鏡という具体的なモノを通じて歴史・古典・英語・化学を相互関連的に理解するための枠組みが設けられていた。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

○本授業は鏡という古今東西の社会で重要な意味を持つモノに着目して多面的・分野横断的なアプローチを図っているところに最大の特色があるが、その着想と方法において応用性の高い授業といえる。鏡以外にも、例えば日時計や水時計をふくむ時計など、実用だけでなく象徴的な意味も持つ様々なモノを題材とすることで様々な授業が可能になると思われる。

○また本授業をカリキュラムの一環として発展させていく可能性としては、鏡を題材とした授業を既に受けた生徒を対象として別の題材に取り組み、様々なモノが持つ技術的・文化的背景をさらに多元的かつ比較的論じていくというアプローチが考えられる。